論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　多雪地域の小都市歴史的中心商業地における連担空間の変容に関する研究
―津軽地方黒石の「こみせ」と「かぐじ」に着目して―

氏　　名　　北原　麻理奈

本研究は、多雪地域の小都市黒石の歴史的中心商業地を事例に、表で連担する「こみせ」と裏で連担する「かぐじ」に着目した。「こみせ」とは雁木とも呼ばれる防雪性の庇下空間であり、「かぐじ」とは主屋裏の付属屋とオープンスペースを含む領域である。各々の空間に関与してきた主体のあり方も含めた歴史的集積の総体としての「こみせ」と「かぐじ」の変容を捉え、この表裏の連担空間を有してきたまちが都市課題にいかに対応してきたかという点に着目しながら、敷地境界を越えて空間を連担させてきた歴史的な仕組みを分析した。その文脈と昭和60年代以降の空間再編との結びつきを明らかにすることで、低未利用化した私的領域に手を加え、歴史的文脈を生かしながら街区単位で空間を再編していくことへの示唆を得ることを目的とした。

第1章は、研究の背景と関連する既往研究を整理したうえで、本研究の目的と視点を示した。本研究の視点の特徴は、「こみせ」と「かぐじ」の連担が、1）積雪寒冷な自然条件、2）敷地利用形態、3)敷地割、街区割の基盤条件、4)主体という4要素の相互作用の中で成立し、社会的、経済的変化を受容し変化してきたと理解する点にある。「こみせ」と「かぐじ」は私的領域内に存在するが、それらの連担は複数の私的領域を横断して形成されるものであり、敷地利用形態と基盤条件を媒介するものと位置づけた。

第2章は、日本社会の近代化の画期として戦後改革を導出した上で、昭和戦前期を対象に、黒石の伝統的な社会構造を明らかにした。社会移動の難しい階級構造の中でも上位に君臨した資産家は「おおやけ」と呼ばれ、彼らは自営の商業者や実業家であり、周辺農村に小作地を抱える寄生大地主であり、資本家であり、また政治家であった。「おおやけ」が個々で、あるいは協力して行う様々な事業によって都市機能が充足され、戦前期の黒石は発展したことを明らかにした。

第3章は雪という自然条件に着目し、多雪地域一般の転換期が昭和30年代に本格化する車社会化と対雪技術の機械化にあることを確認した上で、「こみせ」と「かぐじ」の対雪技術全体における位置づけを整理した。道路が堆雪場として利用されていた戦前まで、「こみせ」の連担は商

業地における防雪性の歩行空間としての役割を担い、連担を形成することは商業地全体の利益にも、ミセの利益にも結びついていた。一方「かぐじ」は敷地裏で堆雪場を融通し合うために連担し、屋根雪による家屋、人身への被害リスクを軽減させ、安全な居住維持に働いていたことを確認した。

第4章は昭和戦前期の黒石を対象として、旧土地台帳を用いた敷地割変遷の分析をメインに、歴史的中心商業地における「こみせ」と「かぐじ」の敷地境界を越えた連担の仕組みを明らかにした。「こみせ」の連担は公的領域と私的領域の利用の境界線を曖昧するが、隣接間の所有の境界線は明確であった。通りを構成する全ての町家が関与することを前提に、各々が敷地間口分の責任を負いながら「こみせ」を横に連担させることで、まち全体にもミセにとっても利益のある空間を成立させていた。

一方で「かぐじ」の連担は、冬季を除き、必ずしも全ての町家が関与するものではなかった。「おおやけ」の広い「かぐじ」は物理的境界で囲い込まれたが、中小規模の「かぐじ」同士は連担を形成し、私的利用と共同利用を上手く並存させていた。また閉鎖性の高い土地取引の慣行のなかで「かぐじ」の所有の境界線は動的であり、商売状況に応じて柔軟に奥行を動かす「かぐじ」が、表のミセが担う商業機能を補完していた。この利用面と所有面での柔軟性によって、連担関係にある家同士の生活を支える空間が成立していたことを明らかにした。

第5章は、戦後の「こみせ」と「かぐじ」の変容を明らかにした。商圏を弘前に奪われつつあった黒石の歴史的中心商業地においては、車社会化に伴う対雪技術の機械化が「こみせ」の必要性を相対的に低下させた。「こみせ」の店舗への取り込みや解体、敷地前面の駐車場化の混在が、歴史的商業地の「こみせ」の連担性を徐々に低下させた。一方で「かぐじ」については、戦後物理的な敷地境界が増加し、雪の無い時期の連担関係は薄まった。ただし敷地割及び敷地利用形態の変化から、昭和40年代に「かぐじ」を含む敷地の一部を連担させて歓楽街を形成する動きと、「かぐじ」を分割、統合し駐車場に転用する動きがあったことを明らかにした。後者は、表のミセが担う商業機能を補完するという「かぐじ」がもつ歴史的文脈を継承しながらも、居住者でなく来街者にとっての利便性を支える空間へと変えた。前者は利用面での柔軟性を継承しつつ、「かぐじ」を商業の場へと変化させるものであった。「かぐじ」自体を商業機能を担う空間へと変える空間再編が、住民らの自発的な動きの中で生じていたことを明らかにした。

第6章は「こみせ」と「かぐじ」が段階的に歴史的資産化し、中心市街地の商業・観光施策における重要な位置づけを得るに至ったプロセスを明らかにした。「こみせ」に対する歴史的資産としての評価は文化財保護の視点を機に出現し、昭和58年度の中町を対象とした伝建調査は、空間的価値のみならずそこに連綿と続いてきた所有意識を含めた価値を評価した。その後昭和60年代に入ると住民や商店街の合意形成が図られ、中町に残る伝統的形態の「こみせ」に観光資源としての役割が付与されるとともに、防雪性の歩行空間としての役割が再評価されたことを明らかにした。

また「こみせ」の連担を保全、再生しようとする住民側の希望から、「こみせ」を壊す旧街道筋の拡幅を代替する空間的余地として「かぐじ」が発見された。「かぐじ」は表の整備を補完す

る空間として位置づけられた後、段階的に「こみせ」に並ぶ歴史的資産と位置づけられたことを明らかにした。

第7章は、中心街区の「かぐじ」の広場化を起点に展開した2街区の空間再編に着目し、その実態と、空間に関与する主体の変容を明らかにした。行政が「かぐじ」を集約、統合し整備した広場を土台とする中心街区での空間再編と、民間事業の連動により「かぐじ」を連担させて回遊環境を創出した一街区での空間再編は、いずれも表と裏を空間的に繋ぎ、裏を表化するものであった。そして今後の街区単位の空間再編もこの方針を引き継いでおり、表の安全かつ快適な歩行空間を「こみせ」の連担の保全、再生により形成しながら、「かぐじ」に行政が介入して集約、統合し、利用に多様な主体が関与することで、低未利用化した「かぐじ」を「ケ」から「ハレ」の空間に変えようとしている。この「かぐじ」の集約、統合は私的領域の一部を公有地へ、私的利用と共同利用が並存する空間を恒久的な公共利用の空間へ、居住の利便性を支える役割を商業や観光を担う役割へと変えるものであり、「かぐじ」の歴史的な文脈を大きく転換させ、周囲との連担関係を断ち切るものであることを論じた。

また「こみせ」については、藩政期には底地を非課税とするインセンティブとともに、自由な通行を妨げる行為を規制するという藩の介入がなされていたが、明治以降は課税対象に組み込まれて町政による介入も無くなっていた。平成17年の中町の重伝建地区選定を経て、まち全体への利益が結果として新規出店や居住維持に結びつくという連鎖を目指して、行政は既存の「こみせ」に対する現状変更行為に規制をかけつつ、新たな「こみせ」の再生を誘導するという形で再度介入していることを確認した。

第8章は結論として、「こみせ」と「かぐじ」の変容を一つの流れとして整理するとともに、空洞化した歴史的市街地の空間再編に向けた論点を考察した。藩政期以降の「こみせ」の変容のなかで一貫していることは、各々が間口分に責任をもち、私的領域の中から公共利用の空間を生み出すという連担の仕組みである。形態や連担に関与する敷地の数、公的主体の介入の仕方は時代によって変化してきたが、所有者がもつ「こみせは自分のものであって、自分のものではない」という意識は、近世から現在まで連綿と継承されている。

一方で「かぐじ」の変容を一続きで見ると、利用面と所有面の柔軟性、そして表が担う商業機能を補完するという役回りが、継承されながらも段階的に変化してきた先に、あえて周囲との連担関係を断ち切ることで、低未利用となった「かぐじ」に手を入れていこうとする空間再編が成立してきた。「こみせ」を壊す都市計画道路の拡幅を前にして住民らが「かぐじ」の活用を希望したこと、私的領域の裏を切り離して集約、統合するということがスムーズに展開したことの背景には、こうした歴史的文脈が存在していたことを明らかにした。

以上より黒石の歴史的中心商業地では、敷地境界を越えた連担の仕組みが空洞化を細やかに再編していくにおいて重要な文脈であった。このことから、敷地単位の変容と敷地割の変容を別個に捉えるのではなく、敷地と敷地割を媒介する連担の仕組みを解明することが、空洞化した市街地が必要とする、使われなくなった私的領域の一部を周囲を巻き込みながら再生していくという空間再編に向けて重要な視点であることを指摘した。

最後に、黒石がとった私的領域の公有地化の可能性について考察を行った。居住者が適切に使いこなし、維持管理することが難しくなった土地を公有地化し、公共的な利益を創出する空間に再編していくことは、まちに新陳代謝を促す一手となる可能性をもつ。公有地化した空間が負の遺産とならないよう、行政が持続的に所有し維持管理していける仕組みづくりをすることの必要性について論じた。